

東サハリン山地と蛇紋岩地帯の植物

斜里郡斜里町 宇仁義和

はじめに

1997年8月、東サハリン山地 Востчно-Сахалинские Горы の蛇紋岩の山に行く機会があった。これは知床博物館の学芸員らの地質調査に便乗したプライベートな旅行であった。ここには、蛇紋岩の土壤に生育する高山植物、北海道では見られない氷河期の自然を伝える植物、そして山火事跡と森林開発の状況を見ることができた。

訪れた地域は日本領時代には地形図が整備されなかった奥地で、現在までほとんど報告がなかった地域である。植物名や分布状況について十分な調査はできなかったが、記録の少ない地域なので報告したい。

行程

今回のサハリンの地質調査のメンバーは、札幌のアースサイエンス株式会社の加藤孝幸氏と山崎誠氏、北海道立北方民族博物館の中田篤学芸員、斜里町立知床博物館の合地信生学芸係長（現・斜里町立図書館長）と筆者の5人。ロシア側の受入は、サハリン州地質局 Сахалингеолком のアレクサンドル・ジャーロフ Александр Жаров 研究員がコーディネーターとなり、招待状の発行の他さまざまな事務手続きを負ってくれた。ほかにスミルニフ Смирных 在住の運転手、さらに科学アカデミー所属の古地磁気研究者夫妻が加わった。

日程は、8月13日に函館空港を出発、同22日に帰着。東サハリン山地には13日に入り、地質調査の目的地の一つであった標高793mのコムソモール山 Комсомольская 周辺の蛇紋岩地帯を、15日から17日にかけて踏査した(図1)。なお、地名や標高は1995年にモスクワで発行された50万分の1図を用い、同20万分の1図を参考にした。

以下、日記風に記録する。

97/8/13

函館空港よりユジノサハリンスクへ。隣席は夕張に生まれ、大戦中にサハリンに渡ったという朝鮮系の人だった。ジャーロフ氏の自宅で打合せのあとユジノサハリンスク駅よりノグリキ行き夜行列車で出発。客車は新しくきれいで、寝台は4人用個室で快適であった。20:50 出発。
車中泊。

97/8/14

早朝5:40にスミルニフ到着、運転手の自宅で休憩、買い出しのあと軍用トラックで北緯50度線の休戦記念碑まで行く。もとの道を戻り、ルクタマ川 Руктама に沿って東サハリン山地を南下。道路状況はきわめて悪く、川と道が一緒になることも多い。場所によってはタイヤの半分が水につかり、軍用トラックでなければ通行は不可能

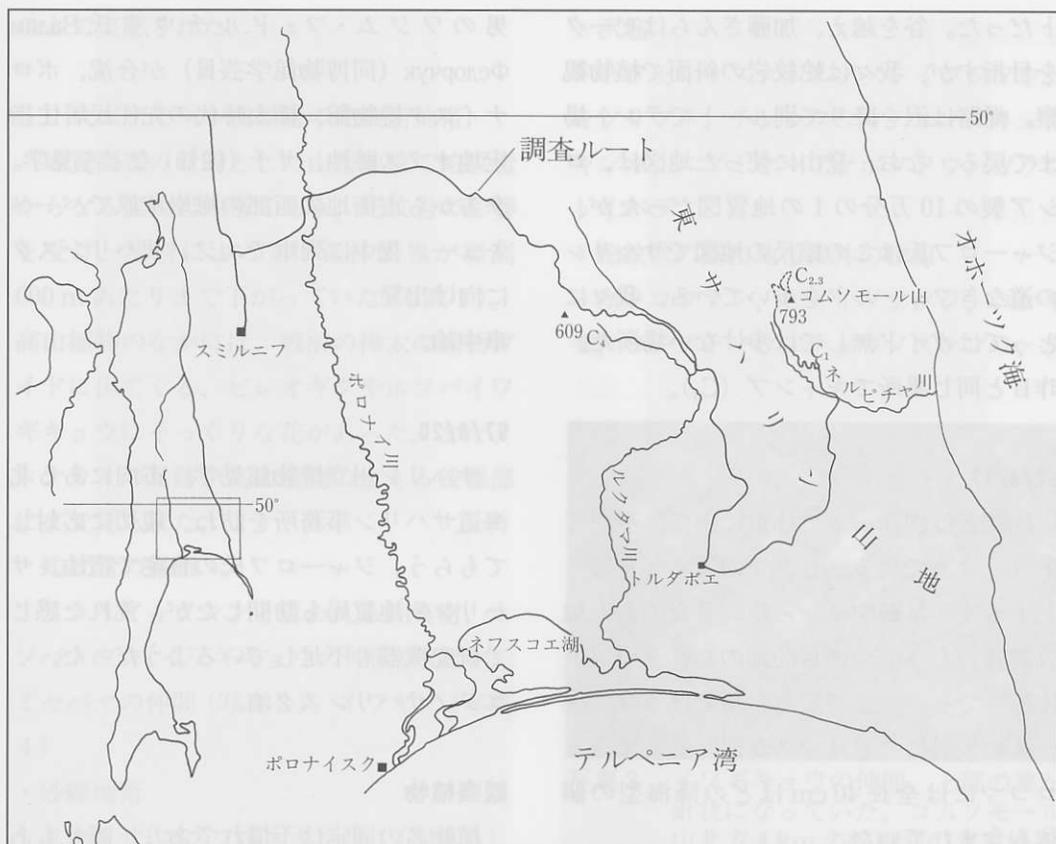


図1 調査ルート

だろう。

造材作業のための集落トルダボエ Трудовое から北上し、ネルピチャ川 Нерпичья へ。ネルピチャ川の近くでキャンプ (C₁)。

97/8/15

トラックで林道を進む。このあたりの道は斜面をトラバースするように造られた場所もある。丸太の仮橋で沢をまたぐが、出水での破壊箇所も多く、道路寸断で経路変更を繰り返す。ネルピチャ川上流で車を降りる。運転手と古地磁気調査の研究者夫妻

の3人はここで宿泊。我々は徒歩で林道を進み、尾根から針葉樹林に入る。

この付近の山には登山道はない。仕事道もなくヤブこぎの連続となる。ササがないのが救いだった。稜線はハイマツと砂れき地帯、鞍部は池沼になっている。

コムソモール山より約1 km 北方の稜線でキャンプ (C₂)。

97/8/16

キャンプ地からヤブこぎで稜線を進み、コムソモール山の近くまで行く。場所によっては急な斜面のトラバースとなるルー

トだった。谷を越え、加藤さんらはピークを目指す。我々は蛇紋岩の斜面で植物観察。帰路は沢を降りて別ルートでテント場まで戻る。なお、登山に使った地図は、ロシア製の10万分の1の地質図だったが、ジャーロフ氏はこの縮尺の地図でサハリンの道なきフィールドを歩いている。我々にとってはガイド無しでは歩けない場所だ。昨日と同じ場所でキャンプ(C₃)。

97/8/17

往路とは別ルートで林道に出て、歩いてトラックまで戻る。ヒグマのふんと足跡、トナカイの足跡が多かった。昼食のあと地質調査のもう一つの目的地のルクタマ川上流部までトラックで戻る。川ではカラフトマスの大群にサクラマスが混じる。オシロコマには全長40cmほどの降海型の個体も含まれていた。ルクタマ川上流でキャンプ(C₄)。

97/8/18

ルクタマ川源流部にある609m峰(20万分の1図では607m)が見える露頭などで岩石調査を済ませてスミルニフに戻る。加藤・山崎両氏は夜行列車でユジノサハリンスクまで戻り、一足先に帰国。我々は、ポロナイスクまで送ってもらい、ジャーロフ氏の知人宅に泊まる。ポロナイスク泊。

97/8/19

サハリン州立博物館からウラジミール・フェドルチウク氏 Владимир Федорчук と長

男のワジム・フェドルチウク氏 Вадим Федорчук (同博物館学芸員) が合流、ポロナイスク博物館、樺太時代の先住民居住指定地オタス跡地、サチ(佐知)などを見学。夕方から市街地の西部の海岸草原でバーベキュー。夜中に列車でユジノサハリンスクに向け出発。車中泊。

97/8/20

サハリン州立博物館見学。市内にある北海道サハリン事務所を訪ね、親切に対応してもらう。ジャーロフ氏の自宅で宿泊。サハリン州地質局も訪問したが、荒れた感じで研究機器も不足しているようだった。ユジノサハリンスク泊。

観察植物

植物名の同定は不慣れであり、誤りもあると思われる。そのため、種まで同定できなかった植物は、~の仲間としたか、あるいは?をつけた。写真を掲載した植物のなかには疑問の残るものもあるので、ご教示いただけるとありがたい。同定は、現地では北海道用のフィールドガイドを用いて行った。標本は持ち帰らず、記録としては一部に写真があるのみである。また、現場での識別ができなかった植物は記録していない。よってイネ科やカヤツリグサ科の植物の多くが抜け落ちている。

地質調査に入った地域はポロナイ川の東側、つまりシュミット線の北側にあたる。このことは、広葉樹の高木がヤナギの仲間とカバノキの仲間だけしか見られなかった

ことで実感された。

1) コムソモール山周辺の蛇紋岩地帯

地質調査の目的とした山岳地域で蛇紋岩からなる変成岩地帯である。蛇紋岩の影響を受け、場所によっては森林限界が標高600mあたりまで下がっていた(写真1)。高山植物のなかには、戦前の樺太の植物ガイドに出てくる、ピレオギクやホソバイワギキョウにそっくりな花があった。また、トナカイの足跡が高山植物の生える稜線部にまで見られた。

・蛇紋岩の露頭

リシリビャクシンと思われる針葉樹、ホソバトウキ、イワギキョウの仲間(写真2)、ミセバヤの仲間(写真3)、イワギク(写真4)

・砂礫地帯

コマクサ、エゾウスユキソウ?(写真5)、アポイマンテマ、タカネツメクサの仲間、イブキトラノオ、シロウマアザミ、エゾウサギギク?、チングルマ、クモマユキノシタ



写真1 コムソモール山への稜線から北北東方向を見る

・沢筋

ハクセンナズナ、エゾノレイジンソウ、キツリフネ、チシマフウロ、エゾノリュウキンカ、エゾミヤマアケボノソウ、カラフトイバラ

・蛇紋岩の露出地帯以外の稜線

ガンコウラン、ヒメイトツツジ、コケモモ、ウメバチソウ、チョウノスケソウ、タ



写真2 イワギキョウの仲間。上部の葉が針状になっていた。コムソモール山北方4kmの蛇紋岩のガレ場で



写真3 ミセバヤの仲間。赤みが強い花を付けていた。写真2と同一場所



写真4 イワギク (ピレオギク)。ピンク色の花を付けていた。写真2と同一場所



写真5 エゾウスユキソウ? 写真2と同一場所

カネトウウチソウ、オオバセンキュウ、キンロバイ、マルバシモツケ、イワベンケイ
・樹林帯

針葉樹林を構成する主な種は、グイマツとエゾマツだった(写真6)。場所によってはモミ属の種が少数まじる。下生えとして、ゴゼンタチバナが目立った。また一面クロウスゴという場所もあった。

カラマツソウ、ゴゼンタチバナ、クロウスゴ、ヒオウギアヤメ、バイケイソウ、マイヅルソウ、シオガマギク、エゾコウゾリナ?、キンミズヒキ、マルバトウキ、マルバシモツケ、サンカヨウ、トガスグリ、タカネナデシコ、エゾムカシヨモギ

2) 東サハリン山地低山部

この山地は広いが、訪れた地域では、北西部から南部のルクタマ川流域はなだらかな丘陵地帯、一方ネルピチャ川流域などの



写真6 エゾマツとグイマツの混交林。写真2と同一場所から写す

北東部は標高は低い谷が深く、急峻な斜面が続く地形となっていた(写真7)。

急な斜面には、粗雑な林道が高密度に造られており、至るところで岩石や土壌の流出を起こしていた。沢を越える場所には丸太の仮橋が用いられていたが、沢の出水時には土砂が仮橋の下に目詰りを起こし、仮橋や林道を決壊させていた(写真8)。おそらくそうなった場合には、その林道は放棄され、新たに別の経路が造られるのだろう。

トラックでの移動途中は、休憩時間を利用しての林道周辺の観察に限られた。比較的平坦な山地の林道沿線は北海道であれば帰化植物が繁茂しそうな環境だった(写真9)。シロツメクサは今回の訪問地の最深部まで分布していた。また遠くまで山火事跡が続くところも多かった(写真10)。

沢沿いでは、北海道では見られないオタカラコウの仲間(写真11)が黄色い花穂を付け、ポロナイブキもあった(写真12)。ポロナイブキの分布は限られていたが、何によって決まっていたのかは判断がつかない。



写真7 針葉樹林。高密度に林道がつくられている。ネルピチャ川流域



写真8 沢に丸太を渡した仮橋。ここは決壊しており、別の林道にルートを探しに引き返した。ネルピチャ川流域

かった。というのも林道が複雑で、現在地が不明のまま観察を続けた場合もあったからである。ただ、川の流れ沿いなど水辺に生育しているようだった。

林道周辺で多く見られたのは次の6種類である。ヤナギラン、シロツメクサ、ヤマハハコ、エゾムラサキニガナ、ハンゴンソウ、コウゾリナ?(写真13)。他にポロナイブキ、オタカラコウの仲間が目立った。

なお、河川の流域で観察植物名が異なっているが、これは地理的な変異よりも観察状況による差が大きいと思われる。



写真9 フィールド初日の昼食風景。9人が乗り込む軍用トラック後方はケショウヤナギ。ルクタマ川上流



写真10 山火事跡の草原。標高609m無名峰の5km東方から写す



写真11 オタカラコウの仲間。ネルピ
チャ川流域

・ネルピチャ川流域

ハンゴンソウ、ヤマハハコ、オオバセン
キュウ、ヨブスマソウ、コウゾリナ、オオ
イタドリ、オニシモツケ、ホザキシモツケ、
エゾムラサキニガナ、エゾノサワアザミ、
アキカラマツ、トリカブトの仲間、オタカ
ラコウの仲間、クガイソウ、オオハナウド、
オオカサモチ、オニシモツケ、ポロナイブ
キ、フキ

・ルクタマ川流域

ヤマハハコ、ヤナギラン、エゾムラサキ
ニガナ、シロツメクサ、ハンゴンソウ、コ
ウゾリナ？、カラフトダイコンソウ？、カ
ラフトアカバナ？、エゾノミツモトソウ、
イヌガラシ、ヤマブキショウマ、エビガラ
イチゴ、ナガボノアカワレモコウ、オオヤ
マハコベの仲間、サジオモダカ、ムラサキ
ツメクサ、オオバコ、ミゾソバ、タライカ
ヤナギ、ドロノキ、ケショウヤナギ、シダ
レカンバ



写真12 ポロナイブキは流れのすぐそば
に生育していた。ネルピチャ川
流域



写真13 コウゾリナ？ 河原に多く見ら
れ、高さ80cmほどで根元から
枝分かれしていた。ネルピチャ
川流域

3) 市街地と海岸

ポロナイスクとユジノサハリンスクでそ
れぞれ1泊した。ユジノサハリンスク市街

ではエゾニュウ、エゾノヨロイグサ、エゾノキツネアザミ?の3種が花の時期でたいへんに目立っていた。また帰化植物も多かった。全体に植物相は北海道と似ており、とくにポロナイスクの海岸草原は斜里付近のものと同じような景観だった。

・ポロナイスク西部の海岸草原

シカギクの仲間、ハマエンドウ、キタノコギリソウ、シロヨモギ、テンキグサ

・スミルニフ市街

ホザキナナカマド、ヤナギラン、ハンゴンソウ、シロツメクサ、イヌカミツレ、サラシナショウマ、ナガボノシロワレモコウ、オオバコ、ナギナタコウジュ、エゾムラサキニガナ、アキノキリンソウ、カセンソウ、ヤマハハコ、セイヨウノコギリソウ、エゾニワトコ、キオン、コウゾリナ?、コシカギク、ホザキナナカマド、キオン

・ユジノサハリンスク市街

エゾニュウ、エゾノヨロイグサ、エゾノキツネアザミ?、オオハンゴンソウ、コゴメハギ、シナガワハギ、イヌカミツレ、コシカギク、オニノゲシ、ゴボウ、オオアワダチソウ

ポロナイスク博物館について

ポロナイスク博物館は、1989年に設置された。レオニーダボ Леонидово (上敷香)の中学校の校長をしていたウラジミール・フェドルチウク氏(現・サハリン州立博物館)が初代館長に就任した。同氏は、北海道開拓記念館などの招きで北海道にも何度か訪れており、斜里にも2回来ている。

当初は、旧共産党本部の建物の一室に準

備室があったが、1993年からサハリン州立博物館の支部となり、現在は古い劇場を建物に利用している。生物、考古、民族の展示があり、収蔵庫には日本領時代の生活道具や林業道具、学校教材などもあった。ニブフ、ウイлтаの資料が充実している。

館長は女性でサンギ氏 Санги、ほかにスタッフとして4人が紹介され自然史系の担当者もいる。なかにはユジノサハリンスク教育大学の学生という女性もおり、雇用形態や組織の構成については、詳しくはわからなかった。

おわりに

今回の執筆にあたり、さまざまな助言をいただいた札幌星園高校の松井洋教諭にお礼申し上げます。また、美幌博物館の鬼丸和幸学芸員にも町民向けの報告の際に植物名を教えていただき感謝しております。また、この旅行や調査の概要については、すでにいくつか報告がだされています。

参考文献

- 鮫島惇一郎・辻井達一・梅沢 俊 1993：新版北海道の花〈増補版〉、北海道大学図書刊行会
- 船崎光治郎 1941：樺太叢書5：図説樺太の高山植物上巻、樺太庁
- 金盛典夫 1993：フェドルチウク氏の贈物、博物館ニューズレター「オホーツクムゼイ」第10号、斜里町立知床博物館
- 合地信生 1998：サハリンと北海道を結ぶ石斧の道、北海道立北方民族博物館友

